

《書評》

『ケーキの切れない非行少年たち』

宮口幸治* 著、新潮社、2019年

森 本 陽加里†

この本の感想は、後にも先にも「親近感」でした。

私は、自身が通常学級に在籍する発達障害児です。小中学校では2度ほど不登校を経験しました。現在は某県内の全日制高校に通うものの、発達障害が明らかとなった小学4年生から引き続き支援を受け続けています。そして高校1年の秋ごろから、自分のように学校生活に生きづらさを感じる発達障害児のために何かしたいと思い、学校生活の中で発達障害児一人一人に合った支援を実現するアプリ「Focus on」を開発中です。

実は、本書を手にとった日、本当は全く違う本を買う予定で書店へ入ったのでした。『ケーキの切れない非行少年たち』というタイトルはどこかで見たことがあり、最近話題だとは感じていましたが、本当にそれだけでした。中で発達障害・知的障害について扱われているとはつゆほども知りませんでした。しかし、そんな私がなぜ手に取ったのか。その理由は、たった一つです。表紙のケーキの切れていない絵に見覚えがあったからです。そう、私もこのような絵を描いたことがあったのです。私自身、学校生活が上手くいっていなかった時、「通級」を利用していた期間がありました。その際に描いたのです。「3等分にケーキを切ってみて」そう言われ、3等分のケーキは食べたことがあるはずなのに、必ず初めに縦横に2本線を引いてしまい、3等分にならない。「訳が分からない！」とできない自分に対してイライラした記憶がありました。そのような経験から、「あ、これ私も書いたことある！」と親近感を感じ、手に取ったことがこの本との出会いでした。

著者の宮口幸治氏は、立命館大学産業社会学部の教授であり、現在は、「(一社)日本COG-TR学会」を主宰されています。自身が児童精神科医であり医療少年院での勤務経験があることから、それらをもとに非行少年の実態や問題に感じた「認知機能の弱さ」について、さらに、自身が考案したコグトレの可能性について記しています。また、近著に、『境界知能とグレーゾーンの子どもたち』(佐々木昭后作画、扶桑社、2020年)、『医者が考案したコグトレ・パズル』(SBクリエイティブ、2020年)、『不器用な子どもがしあわせになる育て方』(かんき出版、2020年)などがあります。

前半部分には、著者の担当した非行少年たちの事例を交えながら、彼らが抱える背景や特徴についてを、後半部分では、学校に焦点をあて、非行少年が背景として抱えている課題と同じようなし

* 立命館大学産業社会学部教授

† 立命館大学産業社会学部学生 (第7回高校生ビジネスプラン・グランプリ審査員特別賞受賞、執筆当時名城大学付属高等学校3年生)

nikonikohiichan@gmail.com

© 立命館大学アジア・日本研究所

『立命館アジア・日本研究学術年報』2021, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.2, pp.130-132.

んどさ・課題を抱える子供がどのように困っているのか、それに対する支援についてなどを記しています。また、最終章の末尾では「1日5分で日本を変える」と題し、著者が大切だと感じている認知機能について、その向上への支援の一つとして「コグトレ」（認知機能強化トレーニング）を紹介しています。

特に印象に残ったことは、非行少年たちの事例と宮口先生の学校教育やそこでの支援への言及についてでした。この本で出てくる非行少年や事例の子供たちの認知の仕方は、私もよく似ていたり、共感できたりするものが多くありました。

例えば、「非行少年の特徴5点セット+1」で示されている、身体的不器用さです。私は、昔から力を入れすぎたり、どこに入れたらよいかわからなかったりして、全身を使って大きく動く粗大運動などが苦手でした。この話を読んだとき、小学生の頃、給食用のワゴンをふざけて少し強く押し出ただけなのに、友達に当ててしまい、先生からひどく怒られたことを思い出しました。先生は、私がふざけて自ら押したと思い「わざとやるのはよくない」と怒っていた記憶があります。しかし、私は、そんなつもりはなかった、なぜあんなにもワゴンは飛んで行ってしまったのだろう、なぜ……という自分から思わぬ力が出てしまい人を傷つけてしまったことに自分が一番驚いていました。

また、認知機能の弱さの具体例として、「見る力の弱さ」「人の表情を読み取ることが苦手」という例が文中に出てきました。これも思い当たる節がありました。私は、今でこそ自己理解がある程度進んだと感じられますが、小学生の頃は全くと言って良いほど自分の凸凹や客観的に見た自分がわかっていませんでした。それだけでなく、他者から自分に向けられる感情や表情にも疎く、自分としては普通に受け取っているのですが、他者から見るとひねくれている、ゆがんで受け取っていると感じられてしまう場面も多くありました。そんな頃の私が読み取ることが最も苦手だった表情は、「微笑む」です。これは母から聞いた話ですが、私の話に母が、「子供らしくてかわいいなあ」などと思い微笑んだ際も、私は必ずと言ってよいほど、「ばかにするな」と怒っていたそうです。思い返せば、その頃の私は、文中の非行少年と同じで感情がすべて怒りにつながってしまっていたのです。また不登校で自己肯定感も低かったので、他者が自分に向けられる感情は、「概ねばかにしているのだろう」とそう思っていたのです。そのため、母の微笑みを微笑みとして受け取れず、「あいつは私を馬鹿にしている、ふざけるな」と、怒りにつながっていたのだと思います。

このように、非行少年や著者が文中であげた事例に対して共感するだけでなく、同時に自身の記憶も思い出され、とても親近感を持ちました。

また、著者の非行少年の事例を通して、最も印象的だった言葉は、第6章のタイトルにもなっている「褒める教育だけでは問題は解決しない」でした。

これは、私が先述した Focus on の実現に向け活動する中で常々思っていることでした。褒めるだけの教育は苦手を先延ばしにしているだけだと考えます。できるところを伸ばすことももちろん大切です。しかし、それだけでは、自立することは難しいと、自分自身が当事者であるが故の感覚から思います。いくら得意を伸ばしても、苦手が苦手のままでは、凸凹の凹を補えないままでは、社会生活に支障をきたしたり、隠すために大変多くのエネルギーを使います。

ここで、次に私が本書の中で共感した言葉が出てきます。それは、「ありのままの現実の自分を受け入れていく強さ」です。著者は学校教育内での支援について言及する章で、「自尊感情と実情が乖離している」ことを問題と位置づけ、それに対する必要な力として、「ありのままの現実の自分を受け入れていく強さが必要」と述べています。

私も、支援を始める第一歩は、「自己理解」だと、自身の経験をもって感じています。自分に凸凹があること、苦手があること、それを補うためには絶大なパワーがいることや、もしかしたらその苦手のために社会生活に支障をきたすかもしれないこと。そんな凸凹の自分をありのまま受け入れることは、とともしんどい行為です。生まれたときから見ていた自分の当たり前の世界や感覚が、認知の弱さによって歪んでいるかもしれないと、常識や当たり前が覆される瞬間かもしれません。しかし、私は、長い期間をかけゆっくと自分自身の凸凹を理解し、受け止めることで、「支援をもらった方が生きやすいかもしれない」「凹がある代わりに、こんな能力は凸なのだ」と支援されることや自分自身に苦手があることを理解し、自己理解を進めてきました。私が Focus on の立案・開発の中でお話を伺った保護者の方たちも「自己理解を進めることは難しい」とおっしゃっていました。しかし、やはり自立していくためには、苦手がある程度カバーする必要がある、そのためには、著者の言う「ありのままの自分を受け止めていく強さ」が必要になるのではないかと感じました。

そしてこの苦手をカバーするために、コグトレを紹介しています。私の自宅にもコグトレの本があり、妹と一緒に数回チャレンジしたことがあります。簡単にできるのに、斜めに線を引いたりなかなか難しい、普段やらない動作があったりして、とても面白かったです。このコグトレは、自分自身の苦手をトレーニングにより、自ら解決していく方法だと思います。

一方で、本書はあくまで非行少年たちの事例がメインコンテンツであり、その発展として学校教育についての記載があり、発展した先での言及はまだまださわりの部分だけを伝えているというように感じました。ですので、個人的には、学校教育に対するより深い意見や、適切な支援を受けられなかったことによる非行行為・二次障害を生まないための支援、セーフティーネットの確立に関する考えなどにも言及してほしかったと思いました。しかしながら、記載されている事例やその背景に至るまでの内容はとても専門的かつ分かりやすく、大いに学校教育や発達・知的障害児支援など様々な場面で役立つ視点であると感じました。

最後に、Focus on について少しかけていただくと、私が実現を目指している Focus on というアプリは、ヘルプを出せる力を身に着け自立することを目標としています。コグトレが苦手を自らの力で解決していくことを目指していたのに対し、Focus on では、自身の凸凹を理解し、そのうえで、苦手を補ってくれる、または、一緒に解決してくれる人を見つけ、頼れる信頼関係を築けることを目標にしています。Focus on についてご興味・ご関心があれば「第7回高校生ビジネスプラングランプリ Focus on」で検索して頂ければ幸いです。

最後になりましたが、この本の書評を書く機会を頂きました本誌編集委員会の皆様には感謝申し上げます。